

P1-017

小児看護学における「子育てカレッジ実習」に導入した健康教育に関する教育効果

上山 和子¹、山本 裕子¹、小田 慈²¹新見公立大学健康科学部 看護学科²新見公立大学 保健管理センター

【目的】

小児看護学における「子育てカレッジ実習」に導入した健康教育に関する教育効果を明らかにし、今後の教育方法に活かすことを目的とする。

【研究方法】

- 1) 研究デザイン：質的帰納的研究
- 2) 対象：2016年から2017年にA大学小児看護学実習を履修した学生の「子育てカレッジ実習」のレポート記録で本調査に同意が得られた38名分。
- 3) 調査時期：2018年2月
- 4) 調査方法および分析方法：「子育てカレッジ実習」のレポート記録を内容分析する。分析の過程では信用性・確証性を高めるため、研究者間で繰り返し検討した。
- 6) 倫理的配慮：A大学小児看護学実習修了後に本研究に関する説明書を配布する。説明の文書には、研究目的、内容分析によるデータ処理、匿名性が完全に確保されていること、成績評価は終了し成績には関係しないこと、参加は自由意思で拒否による不利益は全くないこと、同意が得られない場合は、データから外すこと、成果について公表することを口頭および文書で説明した。新見公立大学倫理審査委員会の審査を受けた。

【A大学小児看護学の子育てカレッジ実習の概要】

A大学小児看護学の子育てカレッジ実習では、健康な子どもの発達段階の理解と子育て支援を目的としている。子育てカレッジ実習の一環に健康教育を導入し、子育てカレッジに来所している子ども及び保護者を対象に季節の健康課題を踏まえながら体験型の健康教育を実施している。

【結果】

レポート記録を分析した結果、【子どもへの伝え方の工夫】【母親の協力を得た展開方法】【子どもと保護者の反応】【健康教育の準備の必要性】【体験型健康教育の効果】の5カテゴリー、12サブカテゴリー、126コードで構成されていた。

【考察】

学生は、子育てカレッジ実習に導入した健康教育を振り返ることにより、子どもの成長過程における健康増進に向けた日々の取り組みを学修できたと考える。健康の維持増進に向けた取り組みとして、手洗いなど日々の生活習慣は健康の維持するための習慣化につながる。さらに子どもとともに体験する保護者にとっても子どもへの伝え方を学ぶ機会になり、家庭での活用につなげる機会になったと考える。今後、子育てカレッジで行う健康教育が保護者の子育て中の健康意識にどのような効果を及ぼすか検討していきたい。

P1-018

小児病棟における安全な呼吸管理～MEと連携して～

渡邊 裕美、細川 加保、吉野 梨々子、中井 美喜子、富田 恵子

鳥取大学医学部附属病院 小児総合病棟

【はじめに】

当院小児科病棟は、人工呼吸器管理使用患者が多数入院している。H28年度の人工呼吸器使用患者数は年間のべ2013人であった。しかし、臨床工学技士（以下MEと略す）の介入はなく、病棟独自で人工呼吸器管を行っていた。そこでH29年4月より病棟担当MEの介入を開始した。使用している呼吸器の種類は10種類程度と多岐にわたり、MEと病棟看護師（以下Ns.と略す）で取り組んでいる呼吸器管理について報告する。

【目的】

安全に呼吸管理を行うためにMEと連携して行ったプロセスを明らかにする。

【方法】

1：Ns.全員を対象に呼吸器モードに関する勉強会、呼吸器アラーム対応に関する勉強会、呼吸器回路に関する勉強会をMEと連携し行った。2：MEには呼吸器使用患者の日々のラウンド依頼や呼吸器回路交換を依頼した。3：在宅で人工呼吸器を使用している患者も多く、業者との連携やラウンド時には、回路カバーの必要性をMEとともに検討し院内独自の回路カバーを使用した。4：呼吸関連インシデントが発生した場合、発生要因や対策をカンファレンスで検討した。インシデント対策の1つとして人工呼吸器使用時チェックリストに内容を追加した。5：在宅で人工呼吸器を使用する家族へ業者とMEにより使用方法の指導を行なった。

【結果】

勉強会にはNs.全員が参加でき、病棟全体で呼吸器管理について基本的知識を深める場を作ることができた。H30年1月現在、人工呼吸器使用患者数はのべ1771人でME介入患者は104人であった。使用開始前や回路交換後など患者に装着する前にはNs.とMEでWチェックし確認後患者へ装着できるようになった。呼吸関連インシデント件数は24件であった。人工呼吸器使用時チェックリストへ項目を追加したことでインシデントの再発を防ぐことができた。在宅に向けて家族への指導はMEを中心にNs.とともに連携して行うことができた。

【考察】

専門的知識を持ったMEとの連携体制を構築したことで不明な点を相談できるようになり、MEを介して業者との連携も速やかにできるようになった。MEによる定期的なラウンドで異常の早期発見にもつながった。また今後もインシデント発生時にはMEと共に対策を検討しNs.に周知していくことで安全な呼吸器管理へとつながっていくと考える。またMEと連携しNs.個々の知識向上ができる機会を継続的に設けることが必要である。